

Withコロナと防災活動

近年発生する災害において、防災における行政対応は「限界点を超えた」と認識されています。それは、気象災害・地象災害・感染症などにおいても同じことが考えられます。そのことが良い意味で報告書として発表されています。内閣府の中央防災会議報告『平成30年7月豪雨を踏まえた水害・土砂災害からの避難のあり方について』(西日本豪雨災害)の締め括り「おわりに」の中に、下記のように記されています。(大切なことなので原文そのままです。)

<国民の皆さんへ～大事な命が失われる前に～>

自然災害は、決して他人ごとではありません。「あなた」や「あなたの家族」の命に関わる問題です。

気象現象は今後更に激甚化し、いつ、どこで災害が発生してもおかしくありません。

行政が一人ひとりの状況に応じた避難情報を出すことは不可能です。自然の脅威が間近に迫っているとき、行政が一人ひとりを助けに行くことはできません。

行政は万能ではありません。皆さんの命を行政に委ねないでください。

避難するかしないか、最後は「あなた」の判断です。皆さんの命は皆さん自身で守ってください。

まだ大丈夫だろうと思って亡くなった方がいたかもしれません。河川の氾濫や土砂災害が発生してからではもう手遅れです。「今、逃げなければ、自分や大事な人の命が失われる」との意識を忘れないでください。命を失わないために、災害に关心を持ってください。

あなたの家は洪水や土砂災害等の危険性は全くなっていますか?

危険が迫ってきたとき、どのような情報を利用し、どこへ、どうやって逃げますか?

「あなた」一人ではありません。避難の呼びかけ、一人では避難が難しい方の援助など、地域の皆さんで助け合いましょう。行政も、全力で、皆さんや地域をサポートします。

以上、過去の様々な報告書にはない、**とんでもない強烈なメッセージ**です。ところがこの報告書は、一般市民の多くが知るものとはなっていません。新聞のトップページに取り上げられてもおかしくない情報です。にも関わらず、やり過ごされた感がある情報になっています。「**皆さんの命を行政に委ねないでください**」とまで記載されているのです。これは水害・地震だけではなく、感染症についても同じことが言えるのです。

それだけ近年の自然災害は、我々の考える防災思考「災害に負けず抵抗し、あらがうこと」の限界点を、

遙かに超えた1000年に一度のとんでもない災害が毎月やって来る状態になっています。「国民の皆さんへ」ではじまる言葉には、一般的な報告書にはない国民のひとり一人に判りやすく丁寧に、かつ今後起こりうる災害が「災害対策基本法」にある国民の生命財産を守るということが不可能になったことを宣言し「行政は万能ではありません」とも記しています。しかし、決して行政はお手上げだといっているではありません。国民に対して**問題意識の共有**を図ろうとしているのだと考えられます。『行政が一人ひとりの状況に応じた避難情報を出すことは不可能』この当たり前のことが当たり前ではない状況「災害過保護・他人に丸投げ防災」と化した国民に『問題提起』をしているのです。これを聞かれた方は「防災や国民の命を守るのは行政の仕事だろう!」と仰る方もいらっしゃるかも知れません。そのような考え方も仕方がないことです。『災害対策基本法』が制定された切っ掛けとなる昭和34年の伊勢湾台風を契機に昭和36年に制定された頃は大きな災害は今ほど連発していました。ところが災害はその後に次々とバージョンアップをしてきました。それらのバージョンアップに我々国民が『防災のアップデート』を怠ってきましたのです。それらは仕方がないと言えばそれまでです。なぜなら、地震に負けない建物の耐震免震制震化、火災には消防力の進化、病気やケガには救急や医療の進化、救助には救助隊や自衛隊の進化等々、これでもかという国民へのサービスが充実してきたからなのです。大変良いことですが、反面国民はぬるま湯に浸かる安心感・安堵感を感じてしまうことになったのです。少し考えてみると判ることで、地震が発生した瞬間にそれらのサービスを国民ひとり一人が公平に受けることはできません。にも関わらず「**それらのサービスを受けることができる**」と勘違いした人が多くなってしまったのです。それら誤解を行政側も様々な方法で情報を正しく伝えようと躍起になってきました。そのひとつに「警報」では人が逃げない!だから『特別警報』を作りました。避難に関しても、**避難準備・高齢者等避難開始→避難勧告→避難指示(緊急)**と、これでも逃げませんかという呼びかけにしました。他にもたくさんの緊急呼びかけが策定され続けています。 他 人々と 場 主体化 客体化 自分ごと

でも何故こんな風に多くの人は「**備える心・構える作法**」を持たなくなってしまったのでしょうか?そこには『主体が行政、客体が市民』という位置付けから『どこかの誰かがやってくれる』という神話ができてしまったのです…… つづく